

マタタビ

(学名: *Actinidia polygama*)

[マタタビ科 マタタビ属]



▲花の咲いている時期には葉が白くなる



▲マタタビの花(雄花)6~7月



▲ザル作りの作業風景



▲マタタビのザル

マタタビは北海道から九州にかけて自生するつる性の木本です。花の咲く6~7月頃には葉の表面が白くなります。これは一説によると小さな花に代わって虫を誘引するためといわれています。只見町を含む奥会津地方では、マタタビのつるを使ってザルを作る伝統があります。晩秋にまっすぐな1年生のつるを採ってきて、冬の間の手仕事でザルを作ります。採ってきたつるは乾燥しないように保管し、①樹皮を剥ぐ、②3 または 4 つに割く、③割いた材の内側の髄を削り取る、④幅を合わせるなどの作業を経てひご状にします。網代編み、格子編みなどで底を作り徐々に立ち上げていきザルの形にしていきます。最後に縁をつけて完成します。編みあがったザルは冬場の軒下に吊るして寒ざらしをします。こうすることで、紫外線と雪の漂白作用で白くなり、強度が増し、カビが生えにくくなるそうです。力のいる作業なので昔は男の人の仕事でしたが、最近の編み組み細工の教室には女性が多く参加しています。マタタビで作られた米とぎざるは洗う時に米の粒をつぶさないとされ重宝されます。また、水に強く、水切れも良いという特徴もあります。日本の多くの地域では、タケでザルを作ります。奥会津でマタタビを使うのは、一つには雪が多くタケが少ないことによります。そして、こういった伝統文化が残るのは自分で使うものは自分で作ろうとする気概によるものといえるでしょう。

企画展

「伝統を編む人々~只見町とボルネオ島と」
期 間：2017年2月13日(月)まで開催

詳しくは、
只見町プラセンター
までお問い合わせ
ください